

# 方向

第一六二号 一九九四年三月一日

京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

梵天の神車 光を放つ 一法華經巡礼 八九一 1994 02 21 原 田 憲 雄

07-13. それら一切の世界のなかには、空虚な世間があり、そこは難所で、暗黒に覆われていて、そこでは月や太陽のように、それほどに神力をもち、それほどに大きな威力をもち、それほどに大きな精力をもっていても、その光で明らかにすることができず、その色彩でいろどることができず、その輝きで照らすことができなかった。ところがそこにさえ、そのとき、偉大な光明が出現した。それら空虚な世間に生まれていた衆生たちもまた、たがいに見合い、たがいに認めるのだ「ああ、他の衆生たちもここに生まれているのだ、他の衆生たちもここに生まれているのだ」と。

sarvesu ca tesu loka-dhātusū yā lokantarikās tāsū ya aksanāḥ samvṛtā andhakāra-tamisra yatre-  
ṅ av api candra-sūryav evam-maha-rādhnikāv evam-maha-nubhāvav evam-mahaujaskāv ābhaya py ābhāṃ n-  
anubhavato varṇenāpi varṇam tejasa pi tejo nānubhavataḥ / tasy api tasmīn samaye mahato vābhā-  
sasya prādurbhavo bhūt/ ye pi tāsū lokantarikāsū sattva upapannas te py anyonyam evam paśyanly  
anyonyam evam samjananti/ anye pi bata bhoh sattvāḥ santihopapannāḥ/ anye pi bata bhoh sattvāḥ  
santihopannā iti /

じぶんたち以外の衆生がいる、ということ、目をふさぎさえしなければ、いつでも見えているはずなのだが、それが見えないのが「世間」であり、その見えない在り方が「暗黒」なのである。戦争のような社会的な不幸もおのれを不幸とおもう個人的な不幸も、その暗黒のなかにあるのであろう。敵とおもう国にも、じぶんと同じさやかな悩みや希望をもってつましく生きる人たちがいっぱいいることを知れば、その国を憎むことなどできないはずである。それが事実なのだ、世間は事実と認めようとしない。事実を事実として照らし出す光明は、『法華経』の説かれた時代だけでなく、今の世でも、常にあきらかに照らしているとは言えない。

07-14. またこれら一切の世界で、諸天の宮殿や神車が、梵天の世界にいたるまですべて、六種に震動し、大きな光明に輝かされ、諸天の神力を圧倒した。このように、比丘たちよ、このとき、それらの世界で、地界の大震動と広大な光明が、世間に現れたのだ。

sarvesu ca tesu loka-dhātūsu yāni deva-bhavanāni deva-vimānāni ca yāvad brahma-lokāt saḍ-vikāram prakampitāny abhūvan mahatā cāvabhasena sphīlāny abhūvan atikramya devaṇaṃ devanubhāvam /  
iti hi dhikavas tasmīn samaye tesu loka-dhātūsu mahataḥ pṛthivī-cālasya mahatāś codārikasyāv-abhāsyā loka-pradurbhāvo bhūt ॥

「神車」を、妙本は「梵宮」と訳するが、これは神々の戦車で、地上でも空中でも移動できるものである。京都の祇園祭にでる鉾や山、また一般の祭りに使われる山車は、これをかたどったものである。

梵天は、世界の創造神といわれるブラフマー神のことである。しかしこの神の観念も様相も単純ではない。宇

井伯寿博士の『印度哲学研究第三』に収める「阿含に現はれたる梵天」はこれを解明したもので、初期仏教との深い関連についても親切な説明がある。そのうち創造神梵天の性質について四つのことを指摘する。その一は、光明・光輝を相とする。その二は、不可見なること。その三は、不可知なること。その四は、全知なることである。四つはたがいに矛盾するところがあり、それらについても博士の深切な説明があるが、ここには直接かわらない。第一についての説明を引いておこう。

神々は自ら輝くといはるゝから何れの神も多少の輝を有するものと考へられては居るが、梵天が現はれむとするとき又は近づき来つたときにはかゝる神々の間にあつても特に光明光輝が現はるゝのであるから、梵天の身体が偉大なる光明を有すとせられてゐるのである。

梵天は創造神であるから、世界の自在主であり全能者で、一切に打ち勝ち一切を制圧するものであり、そうして偉大な光明を有するものであるのに、その梵天さえも、空虚な世間で、暗黒に覆われている。いまその暗黒のうちをばらい、梵天の光明さえ圧倒する大光明が現れた、というのである。

07-15. そのとき、東方のあの五十千万億世界の中で、梵天の神車は、いちじるしく光り、熱し、輝き、きらめき、火花を放った。そこで、比丘たちよ、かれら大梵天たちはこう考えた、これら梵天の神車がいちじるしく光り、熱し、輝き、きらめき、火花を放っているが、これはどのようなことの前兆なのであるうか、と。

そこで、比丘たちよ、これら五十千万億の世界で、かれら大梵天たちは、たがいにその宮殿をたずねて話しあつた。

atha pūrvasyāṃ dīśi tesu pañcāśatsu loka-dhātu-koti-nayuta-śata-sahasresu yāni brāhmaṇi vimā-  
ṇi tāny alīva bhrajanti tapanti virājanti śrīmanity ojasvīni ca / atha khalu bhikṣavas tesāṃ  
mahābrahmaṇām etad abhavat / imāni khalu punar brāhmaṇi vimāṇāny atīva bhrajanti tapanti virā-  
janti śrīmanty ojasvīni ca / kasya khalv idam pūrva-nimittam bhaviṣyati / atha khalu bhikṣa-  
vas tesu pañcāśatsu loka-dhātu-koti-nayuta-śata-sahasresu ye mahā-brahmaṇas te sarve nyonya-  
bhavanāni satv ārocayāmasuḥ ||

梵天は万物を創造するものであるとすると、創造する者は、創造されるものとまったく同じであるとは言えないにしても、同じ部分を含むわけである。創造されたもののなかに世間があるのだから、梵天にも世間と同質のものが存在する。世界の中の空虚な世間の暗黒は、梵天の本質から流出した暗黒であって、光明・光輝を相とすにしても、空虚な世間の暗黒が増大すれば、梵天も光輝を失って、世間を照らすことができなくなる。そのような梵天を圧倒する大光明が現れたのだ。この大光明は、梵天の光明を圧倒するけれども、その圧倒は、梵天の光明を消し去るのではない。空虚な世間の暗黒とともに存在すると、光明を本質とする梵天さえ光を失ったのに、あたらしいこの大光明によって、梵天は光明をとりもどし、さらにかがやかしく光り輝いたのである。

07-16. さて、比丘たちよ、「一切の衆生の救済者」という名の大梵天がいて、梵天の大きな集団に、偈によって語りかけた。

atha khalu bhikṣavah sarvasatvatārāṇāṃ nāma mahā-brahmaṇi tam mahāntam brahma-gaṇam gāthābhir

adhyabhasata ||

07-17. たいへん歡喜して、いま、わたしたちのこの美しい神車は、光を放ち、

輝きと光でわたしたちを楽しませる。なぜだろう、このようなことがいま起こったのは。(一八)

さあ、そのわけをたずねてみよう、だれか天子がいま出現したのか、

かれにこのような神力があつて、未曾有のことがいま見られるのか。(一九)

あるいは人間の王者である仏が、いまだこの世間に出現し、

その前兆として、このように輝くのだろうか、十方が、いま。(二〇)

atīva no harsita adya sarve vimāna-śreṣṭhā imi prajavaranti /

śriyā dyutīyā ca mano-ramā ye (W:mano ramāya) kim karanam idrśu bheṣyate 'dya ||18||

sādhu (W:sādhu) gavesāmatha etam artham ko deva-putro upapannu adya /

yasyānubhāvo ayam eva-rūpo abhūta-pūrvō ayam adya drśyate ||19||

yadi vā bhaved buddha narendra-rāja utpannu lokasmi kaḥiṃ-cid adya /

yasyo nimittam imam eva-rūpam śriyā dāśo dikṣu jvalanti adya ||20||

※前号正誤 四頁一三行 tathāgatenaārthatā → tathāgatenaārhatā

四頁一六行 sphāny → apḥuṣāny

日夕著書罷  
 驚鴻霜落素絲  
 鏡中聊自笑  
 詎是南山期  
 頭上無幅巾  
 苦蘂已染衣  
 不見清溪魚  
 飲水得自宜

山本のぶを刻（一九八八 一）

李賀 詠 憶 其二 感想 天を夢みる

夕方になり書き物をやめると

霜降るみたいに落ちる白髪

鏡の中の自分がいささか滑稽だ

《南山の寿》なんてがらかね

頭には束ねのきれも巻かず

身にはキワダで染めた野良着

まあごらん 清らかな谷川の魚

水飲んで気ままにやっている

役人をやめて昌谷に帰った八一三年の作品であろう。軽い自

嘲と落ちつかぬ気楽さの入り混じった微妙な作品。「南山の

寿は、驚（か）けず崩れず」という句が『詩経』にあるが、

そんな柄ではないというのだ。（1994 02 27 原田憲雄）

一日中雪まじり

1994 01 29

原

田

慶

みぞれと雪とで

びしょびしょの日だ

ビニールの合羽を着て

墓に花を供えて歩く

これでは花が氷って透きとおり

黒ずんでしおれてしまうのだけれど

今日はここに骨を納める人があるから

雪の中で墓地を飾る

仏様の花はいつも

ほほえみながらわたし達を見ている

だから雪がやんでくれるといいのにと

空を見上げても

目にも口にも雪が舞いこんでくる

一時やみそうになって

また降ってくる

骨を納めてみんなが帰り

日が暮れてもまだ降っている

以前にはこんな時

寒行のうちわ太鼓が聞こえたものだが

今年はまだ聞かない

墓地の外で立ち止まって

いつせいに打たれると

恐ろしくも思うのだけれど

「寒行をする人がいなくなったのかねえ」

などと話したりしながらカーテンの隙間から

外をのぞいてみたら

夜のうす明かりの中にまだ

雪が降っていた



真如堂

1994 02 01

原田慶

秋の終わりのころ

午後おそく

真如堂の裏山を登って行った

お参りの群れが下りて来てすれ違い

誰もいなくなった山道には

風に鳴る木々とシイの実の降る音

崖下の車庫でバスを誘導する笛が響いてくる

足もとのシイを拾って握りしめ

せまい石段を登った

お堂はすでに暮れはじめて

犬をつれた夫婦が足早に帰って行く

中の阿弥陀如来の手から

引かれていますという白い綱が

境内にまっすぐ伸びていた

そっと振ってみたが

如來の手ごたえはなくてただ軽い

今夜お十夜念仏は講の人が鐘を叩くのだと

茶店の人は言った

門を出てどちらへ行こうかと

ためらいながら歩いているうちに

京大医学部の献体慰霊塔の傍へ出た

丘のような石碑が建っていて

家は遠慮がちに

わざと人から忘れられたような

味気ない広場だから

いっそ山の中だったら

どんなによかったかと思う

果てもない夕暮れの風の中を

ひとり行く寂しさはわたしを萎えさせる  
今はまだ帰り着くところがある

急いで迷い込んだ道を引き返してくると  
少し前にどこかで出あった若い夫婦が

こどもを手押し車に乗せたまま

二人で持ち上げ

狭い石道を曲がって消えた

見知らぬ家々の間を急ぎ足に抜けて

ふと広い通りに出ると

明るい光が浮かび上がり

ガラス戸の中に人が見える

それが焼きたてのパンの店であることに気がついて

ようやくわたしは

確かな足どりをとりもどす

温庭筠

(詞という詩七)

1994 02 23 原田憲雄

温庭筠は、初めの名は岐、字は飛卿。太原(山西)の人で、唐の二代皇帝太宗の宰相であった温彦博の子孫といわれています。正確な生卒年はわかりませんが、八一〇年前後に生まれ八七〇年の数年後に死んだようです。少年時代から頭がよく、詩文に巧みで、李商隱とあわせて「温李」と呼ばれ、さらに前回到紹介した段成式を加えて「三才」などと評判されました。琴や笛のような音楽演奏にも才能があり、豪放だのに女心の機微をうたった艶っぽい歌曲ばかり作り、貴族の道楽息子たちと博打をうっては飲み歩く、といったことが重なり、そのほうが名声が高くなってしまう。進士の試験を受けても、隣近所の席の受験生に教えてやって、教えられたほうは及第するのに、本人は落第し、なんと受験しても通りませんでした。

宰相の令狐綯が才能を愛して出入りを許します。当時の一六代皇帝宣宗が菩薩蛮をうたうのが好きだったので、綯が庭筠に新しく作らせ、進呈します。あらかじめ口止めしておいたのに、「なあに、あれはおれが作ったのさ」と喋ってしまいます。綯がある故事についてたずねると、『南華真經』にありますよ。珍しい本でもないんだ。あなたも政務の暇にはちとお読みになることですか」といったり、「ちかごろ中書省には將軍が坐っているんだ」となどと綯の無学をあてっこするので、さすがの宰相も庭筠をうとんじるようになります。『南華真經』とは『莊子』のこと。中書省は詔勅の起草などをつかさどる皇帝の書記機関です。

それでも湖北の隋県や方城の尉となり、中央に帰って国子助教となりますが、「竟に流落して死せり」と元の

辛文房の『唐才子伝』に記しています。尉というのは、県令の下で徴税や警察をつかさどり、従九品の上か下。高等文官としては最下位。県令は日本でいえば市長にあたります。国子助教というのは、国立大学にあたる国子監のうち、高級貴族や官僚の子弟を教える学部を国子といい、その教授が国子博士で、助教授にあたるのが国子助教です。助教の定員は二名で従六品上。県尉よりはだいぶ上ですが、官僚としては大したことはありません。

森鷗外の小説「魚玄機」で、詩才にたけた歌妓あがりの女道士の玄機が、殺人の容疑で逮捕されたとき、李億を始として、曾て玄機を識つてゐた朝野の人士は、皆其才を惜んで救はうとした。只温岐一人は方城の吏になつて、遠く京師を離れてゐたので、玄機がために力を致すことが出来なかつた。

と書いています。この「温岐」が庭筠で、かれは、彼女の才能を愛して詩をみてやっていたのです。鷗外のは小説ですから、すべてが事実とはうけとれませんが、玄機には温庭筠にあてた詩が残っていて、彼女が庭筠を尊敬し、心の支えとしていたことがうかがえます。その詩をかつて森田曠平君との共著『女人春秋』に入れておきました。ここにはその原文は省いて、訳文だけを掲げておきましょう。「秋の夜」の原題は「飛卿に寄す」、「冬の夜」のは「冬夜 温飛卿に寄す」です。

### 秋の夜

階段のあたり　こおろぎ　乱れ鳴き

庭木々は夜霧こめ　すがすがしい

月の光に 隣家の音楽ひびき

楼上からは 遠い山々の明るいこと

風ふいて 竹のベッドは涼しすぎ

琴ひけば 旅住まいのわびしさ

先生は 嵯康せいかうどののように筆無精

秋の思い 何で慰めればよいのかしら

冬の夜

灯ひのもとに 詩句をもとめ 苦吟して

ねむれぬ夜の しとねの寒さ

庭いっぱいの木々の葉にさびしく風ふき起こり

薄絹のカーテンごしに月が沈んでゆくところ

ふんぎりはまだつかないが 出家しようと思えます

世の盛衰のむなしさに おのれの心が見えてきて……

おちついた主婦の座にはつけそうにありません

日暮れ 雀がチチチと 林をめぐって鳴いています

嵇康は、魏から晋にかけての、思想家でもあり文豪でもあった、竹林の七賢の一人です。「出家」というのは、女道士、すなわち道教の尼さん、になることをさしています。

さて、庭筠は詩人としても晩唐の代表的な作家ではありますが、かれの名を不朽にするのは、詩ではなく、その作品ゆえにかれの出世をさまたげた、艶っぽい花柳の女の心情をうたった詞によってなのです。

詞の製作が李白に始まったかどうかは疑問にしても、敦煌から出土した作品からしても、玄宗の時代にすでに作られていたことは確かですが、いま「詞」として読まれている詞らしい作品はというと、温庭筠のものこそがそれなので、詞の実質的な開拓者はいかた、というのが定説になっています。そうして、唐につづく五代の作者たちも、さらに宋代初期の作者たちも、詞をつくるときは、いつもかれを先生とあおぎ、かれの作品を学んだのです。解説はこれくらいにして、その作品にはいつてゆきましょう。

雨 さやさや

〔唐〕温庭筠

河傳

みずうみを

湖上

ながめると

閑望

雨 さやさや

雨瀟瀟

けふる浦べの花の橋 路はるか

烟浦花橋路遙

おとめこのみどりの眉に愁いは消えぬ

ひねもす

魂まよう 潮騒しほざいの暮れるまで

謝娘翠蛾愁不銷

終朝

夢魂迷晚潮

旅のおかたは天のはて 帰りの舟はいつかしら

春はもう暮れ

蕩子天涯歸棹遠

春已晚

鶯のこえ 腸はらわたをひきちぎる

鶯語空斷腸

若耶じやふやの溪たにの

若耶溪

溪の西

溪水西

柳つらみの堤つみに

柳堤

聞こえませぬ あのかたの馬のいななき

不聞郎馬嘶

「謝娘」は、謝家のお嬢さん、というほどの意味です。謝家は、謝靈運などを出した六朝の大貴族です。その一族の娘といえは、美しくて優雅な女性の代表、ということになります。謝娘を、靈運の親類すじにあたる謝道韞とうこんとか、謝安の愛した歌妓だとかいった説もありますが、要するに美人の代用詞で、日本でなら「小町」とでもいうところです。若耶溪は浙江紹興にある溪で西施せいしという美女がいたところです。越王句踐こうせんが西施を呉王夫差ふさ



に贈り夫差が彼女の美しさに溺れて国を滅ぼしたことは有名です。しかしここでは美人の住所というほどの意味に使っているので、その美人は前段の謝娘、うつくしいおとめ、です。

柳の糸は

〔唐〕温庭筠

更漏子

柳の糸は長く

柳絲長

春の雨は細い

春雨細

花のむこうの水時計 音はるばる

花外漏聲迢遞

おどろく塞の雁

驚塞雁

とびたつ城の鳥

起城鳥

絵屏風の金の鷓鴣

畫屏金鷓鴣

霧うすれ

香霧薄

透くすだれ

透簾幙

謝家の池殿でなげくひと

惆悵謝家池閣

紅ろうそくの灯をそむけ

紅燭背

とばりをたれて

繡簾垂

夢に慕うと あのかたはごぞんじない

夢長君不知

「塞の雁」とは北方の国境地帯からやってきた雁ということ。前漢の蘇武が匈奴に囚われた時、雁の足に便りを結びつけて放ったという話は有名です。中国では町は城壁で囲みますから「城の鳥」は、まちの城壁にとまっている鳥です。ここまでが家の外、その物音を聞く女性のいる部屋のようなすが「絵屏風の金の鷓鴣」です。第二段はそこにこもる「謝娘」の思いです。「池殿」は池に面した二階建て。「灯をそむけ」とは、灯火を自分のほうには遮蔽して置くことです。心に憂いがあると灯火に照らされることも避けたくなるものです。「あのかた」は、この美人を離れて、遠く、あるいは国境地帯にでも、行ってしまっている男性です。

星はまばらに

〔唐〕温庭筠

更漏子

星はまばらに

星斗稀

音楽もやみました

鐘鼓歇

簾のむこうは 暁の鶯と 残る月

簾外暁鶯残月

蘭の露は重く

蘭露重

柳の風は斜めです

庭いっぱい散りしく花

たかどのの

欄干からながめると

よみがえるのは去年のかなしみ

春暮れかかり

思いは尽きぬ

すぎさったよろこびは 夢のよう

驚ないて

〔唐〕温庭筠

驚ないて

花は舞い

春まひる

雨しとしと

柳風斜

満庭堆落花

虚閣上

倚闌望

還似去年惆悵

春欲暮

思不窮

舊歡如夢中

訴衷情

鶯語

花舞

春晝午

雨霏微

金の枕に

金帯枕

錦のしとね

宮錦

鳳凰のとばり

鳳皇帷

蝶のとびかうしだれ柳は

柳弱蝶交飛

なよなよ

依依

遼陽で戦うかたの便りは稀で

遼陽音信稀

お帰りは夢のなかだけ

夢中歸

遼陽は、遼寧の都市ですが、このあたりは朝鮮との国境地帯で、たびたび戦いがありました。この詞の女主人の恋人は、その戦いに出かけたまま、めったに便りもよこさない軍人なのでしょう。第一線での激戦中なら、手紙などは書く暇もなく、戦いがひと休みしても、軍人の書いた便りが故郷の恋人に届く確率は、百に一つ、千に一つだったに違いありません。でもそんなことは、当時の女性には分からなかったでしょうし、分かっているとしても、淋しさには変わりありません。戦場でも、純情なおとこなら、毎日、恋人のことをしのんでいることでしょうが、多くの軍人は、戦地付近で新しい恋人を作っているのです。かれらも故郷の恋人を思っているでしょうが、いつ戦死するかしれず、帰るあてのない異郷では、そうなるのも人情というものでしょう。純情なやつは、そこでは頓馬とよばれて笑い物にされることは、二〇世紀の戦争でも変わりありませんでした。

花映える

〔唐〕温庭筠

酒泉子

花映える柳のかけで

なんとなく浮きくさの緑の池に

欄干にもたれ

さざなみを見ていると

雨さやさや

花映柳條

閒向綠萍池上

凭闌干

窺細浪

雨蕭蕭

ちかごろは便りもたがいに疎くなり

ねやはさびしく

屏風かこい

すだれ垂れ

春の宵はただすぎてゆく

近来音信兩疎索

洞房空寂寞

掩銀屏

垂翠箔

度春宵

秋風すこく

〔唐〕温庭筠

玉胡蝶

秋風すこく離ればなれのいたましさ

いくさから帰られないが

戦場の草は枯れたでしようか

ここ江南に雁かりのたよりの遅いこと

芙蓉のような顔はすっかり衰えて

柳みたいなみどりの眉も色さめて

うらがれの秋のかなしみに

たれが知ろうわたしの胸の裂けるのを

花ほころび

〔唐〕温庭筠

花ほころび

雨は晴れました

簾すだれも捲かず

夢のなごりのかなしさに 暁の鶯を聞く

秋風凄切傷離

行客未帰

塞外草先衰

江南雁到遅

芙蓉凋嫩臉

楊柳墮新眉

揺落使人悲

斷腸誰得知

遐方遠

花半拆

雨初晴れ

未捲珠簾

夢残惆悵聞曉鶯

寝化粧くずれ 眉墨うすれ しどけないこと

鏡にむかい 鬢つかね

うすぎぬ かるく……

宿粧眉浅粉山横

約鬢鏡裏

繡羅輕

以上のうち、河伝かでん、更瀨子こうろし、玉胡蝶ぎよくこちよう（単調）、選方遠せんかほうえん（単調）は温庭筠が始めた詞調です。

小山がさねの

〔唐〕温庭筠

菩薩蠻

小山がさねの高髻たかまげに金のかんざしきらきらと

雲のような鬢びんの毛はたれかかる初雪の頬

ものうげに起き 眉えがき

くしけずり 粧まきおうのも けだるいこと

小山重疊金明滅

鬢雲欲度香腮雪

懶起畫蛾眉

弄粧梳洗遲

花てらす合わせ鏡に

花の顔かたみにうつり

あたらしくまとううすぎぬ

照花前後鏡

花面交相映

新帖繡羅襦

刺繡はつがいの金の鷓鴣

雙雙金鷓鴣

「小山がさね」は屏風だとするもの、髪<sup>かみ</sup>の結び方とするもの、眉<sup>まゆ</sup>の描き方とするものなど、説がさまざまに分かれますが、ここでは髪<sup>かみ</sup>の結び方にとっておきました。

水晶の

〔唐〕温庭筠

菩薩蠻

水晶のすだれのうちら 玻璃<sup>はり</sup>の枕

水晶簾裏玻璃枕

匂いあたたかに夢さそう 錦<sup>にしき</sup>の鴛鴦

暖香惹夢鴛鴦錦

河辺の柳は霧のよう

江上柳如煙

雁は飛ぶ 月のこる空

雁飛残月天

蓮系のころもに秋の色あさく

藕絲秋色淺

さまざまの剪り紙人形

人勝參差剪

左右の鬢に花させば

雙鬢隔香紅

風にそよぐ玉のかんざし

玉釵頭上風